東日本大震災から10年

何にどう向き合うべきか

2020.3.9　愛知学院大学モーニングセミナー

武田　真一

宮城教育大学特任教授

3.11メモリアルネットワーク共同代表

※PTT引用記事、写真は河北新報紙面から

■話すこと・要点

・誰のためでもなく、皆さん自身のためにぜひ、あの歴史的な大災害のことをもう一度、深く心にとめていただきたい

・そして、あの出来事がきちんと広く、長く後世に伝わって、災害による犠牲がなくなるよう、混乱が回避できるよう、一人一人が伝え継ぐ担い手になってほしい

自己紹介震災伝承と防災啓発の役割の一端担う

・1981年 河北新報社入社

・2011年 震災発生時に報道部長

以後、編集局次長、論説副委員長

・2016年「防災・教育室」新設と同時に、室長

震災伝承と防災啓発のプロジェクト専任で担当

・2019年 定年退職後、宮城教育大学へ

「311いのちを守る教育研修機構」特任教授

東北大学災害科学国際研究所学術研究員

★2018年暮れから、語り部伝承連携組織

「3.11メモリアルネットワーク」共同代表

■震災10年で大切にしたい視点

① 復興の成果と矛盾を総括して、次につなげる
② 被災地と被災者の課題を知り、支援を続ける
③ 残された教訓を振り返り、自分の備えに生かす
④ 記憶と記録を風化させないよう、伝承に力を入れる

■10年の歩みを振り返る

・これから、スライドショーを見る
・発災時からの写真、13分ほど、音声なし

次のことを念頭に見てください

・震災は過去の出来事か
・「忘れない」は誰のためか
・被災地・被災者とは何か

■復興の総括は不可欠の視点

・被災地は大きく変貌、痕跡消える
・34兆円事業の「成果」
・ハード偏重でソフトは1割弱
・行政用語としての「復興事業」に終始
・未来の希望を持てるものになったか

震災関連死　3767人

震災が原因で自殺した人　約240人

震災関連の孤独死　約500人

うち**半数は災害公営住宅**での孤独死

震災関連死 福島14人増

9月末時点・3739人

復興庁は27日、東日本大震災をきっかけに体調を崩すなどして亡くなる「震災関連死」と認定された人が、9月末時点で10都県の3739人になったと発表した。3月末時点の前回集計から16人（岩手2人、福島14人）増えた。

年齢別では66歳以上が全体の約9割を占めた。都県別は東京電力福島第1原発事故で長期避難を強いられている被災者が多い福島が約6割の2286人で、宮城928人、岩手469人だった。

東日本大震災 7年 8ヵ月

1人は転出後、集会所で

害日本大震災で被災した石巻市のプレハブ仮設住宅の敷地内で9月、2人が相次いで死にしていたことが9日分かった。市によると、いずれも遺書は確認されていないが自殺とみられる。1人は災害公営住宅に転居していた女性（70）で、以前住んでいた仮設住宅近くの集会所で亡くなった。もう1人は仮設住宅に入居していた男性（56）で、新屋の完成を間近に控えていた。

市によると、女性は9月19日午前8時15分ごろ、集会所の玄関前で首をつった状態で発見された。女性は2016年6月ごろ、集会所近くの仮設住宅から災害公営住宅に転居した。引っ越し後も、仮設住宅に度々顔を出していた。

災害公営住宅に転居間は離れ、1人暮らしだった。孫と2人で住んでいたが、今年1月ごろに孫が自宅を3月に市社会福祉協議会の訪問では「変わりない」と

地域生活支援員が訪問した際は暮らしや体調面の変化から不安や寂しさを感じている様子だったが、6月の

災害公営住宅に転居した女性が亡くなっていた仮設住宅の集会所

石巻仮設住宅2人自殺か

9月ともに1人暮らし

東日本大震災 9年

災害公営 孤独死251人

昨年末現在 仮設住宅上回る

害日本大震災で被災した岩手、宮城、福島3県の災害公営住宅で、離にもみとられずに亡くなる「孤独死」が昨年末現在で計251人に上ることが、3県警への取材で分かった。仮設住宅の計243人を初めて上回った。3県の災害公営住宅は59%完成し、高齢者を中心とした見守りが課題になっている。

（3・24面に関連記事）

災害公営住宅と仮設住宅の孤独死数はグラフ表の通り。災害公営住宅の孤独死は岩手46人、宮城162人、福島43人で、計251人。仮設住宅は岩手46人、宮城109人、福島88人、岩手計243人。65歳以上の高齢者は193人で全体の76・9%を占めた。

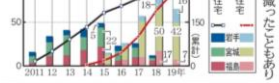
性別は岩手、宮城の2県で男性148人、女性60人で男性が2・5倍に上った。福島県警は死者の性別を明らかにしていない。

被災3県の孤独死の累計

	仮設住宅	災害公営住宅
岩手	46	46
宮城	109	162
福島	88	43
3県計	243	251

※河北新報社調べ。19年末まで。単位は人

被災3県の孤独死の推移



歴年ごとの推移は2014年の3人から15年15人、16年26人と増え、17年は前年比2倍超の57人、18年はさらに増えて85人、19年は65人と減少に転じた。

仮設住宅の孤独死は宮城109人、福島88人、岩手46人の順で多かった。15年の49人がピークで、仮設そのものが減ったこともあり

震災は「終わった出来事」ではない

被災者共通の思い「備えて」

◎石巻市南浜　／当時２２歳の女性

・自宅で被災、同居の母、祖母犠牲、父はまだ行方不明
・「ここまで津波は来ないから大丈夫」逃げようとしなかった
・「地域でも声をかけあうようなことはなかった」
・「ラジオなどで警報の情報を早く手にしていれば、助かったのに」
・「わたしが味わった後悔は絶対にしてほしくない、備えて」

誰のために、何を「忘れない」のか

・震災を自分のために捉え直す
・「被災地」「被災者」は日常に内在
・災害前から、既に被災地・被災者の意識

自分や家族が犠牲にならないために、震災をことあるごとに振り返って備え、意識してそれを繰り返す

命を
つなぐ
未来を
拓く

3.11 メモリアルネットワーク

岩手・宮城・福島の草の根連携組織
全国に約500人、約70団体の会員

3.11 メモリアルネットワーク

命をつなぐ 未来を拓く

東日本大震災の伝承を通じて
・災害でいのちが失われない社会
・被災の苦難を軽減し再生に向かえる社会
の実現に貢献します

全国の皆さんとともに
記憶と教訓を伝え継ぐ輪を広く、未来へ

(問)震災を伝え継ぐのは誰か

・震災を体験しなかった人は、話しにくい、引け目がある
・震災を伝えられない、あるいは、伝える資格はないのではないか

■ゼミ生・3年生の意見

(小学6年で被災、学校避難を経験、祖父が犠牲)

・被災経験者だから震災を語れる、経験していない人は語れないということはない

・大事なのは、あの出来事をきちんと共有すること、経験の有無にかかわらず、語り合い、伝えあうこと

→ゼミの共通理解に

・未体験の1年生「震災に向き合うことで初めて知ったことが多くある。これを子どもたち、次の世代に伝える役目をわたしたちは担っている」

復興とは何か

・インフラが整う、産業が復活する…
・暮らしの基盤が確かなものになる…
・被災地、被災者に笑顔が戻る…
・いろんな説明、定義が可能

◎出来事をきちんと振り返り、総括ができる

・被災体験の有無に関係なく
・あの日の出来事、その後、いまに向き合い
・教訓を伝え継げるようになる

・震災は過去の出来事ではありません
・自らの命、家族の命を守り、混乱を繰り返さないために震災にきちんと向き合い
・頭と心の中に、考えたこと、あの出来事と教訓をしっかりと刻む
・伝え継ぐ主体を自らが引き受けて、家族や子どもや同僚と語り合う

震災伝承と防災啓発の未来
犠牲と混乱を最小限にできる社会
皆さんこそが築くものです